

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00472

研究課題名（和文）フランス第三共和政における文学と都市計画 ゾラとトニー・ガルニエ

研究課題名（英文）Literature and urbanism in the French Third Republic: Zola and Tony Garnier

研究代表者

彦江 智弘（Hikoe, Tomohiro）

横浜国立大学・大学院都市イノベーション研究院・教授

研究者番号：80401686

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：文学研究においてはかねてより大きな問題圏のひとつをなす「都市」に対して「都市計画」という観点を前景化させることでいかなる研究のパースペクティヴが拓かれるのかを検討した。本研究の起点として取り上げたエミール・ゾラ『労働』と同時代の建築家・都市計画家のトニー・ガルニエ『工業都市』については、文学が都市計画において直接的な参照点となりうるという特異なケースであるとして両者の関係に光をあてた。その一方で、ゾラだけでなく例えば新印象派など他の芸術家や作家が織りなす問題系の存在の一端を浮かび上がらせ、そこでは都市計画と文学とは一定の緊張関係に置かれていることも明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は文学と都市というテーマを都市計画という観点から補うものであり、現代社会においても喫緊の課題である都市問題に対して文学という観点から検討を加える足がかりを構築することを目指している。またフランス文学研究においては、都市という観点では第2帝政期が比較的注目されることが多いが、これに対して続く第3共和政期を「都市計画」の時代と位置づけ、黎明期の都市計画と文学の関わりに光をあてるものである。実際、本研究では主にゾラの作品を起点としたが、研究を進めるなかでこの時期に都市を主題とするが従来はあまり取り上げられてこなかった作家や作品の存在が浮かび上がってきており、新たな研究の端緒も示すことができた。

研究成果の概要（英文）：We considered what kinds of research perspectives could be opened up by bringing the theme of "urbanism" to the forefront of "cities in literature". The starting point of this research is the relationship between Emile Zola and Tony Garnier, a younger architect and avid reader of Zola's novels; from our point of view, this relationship is a unique case that allows us to examine how literature can have a direct impact on urbanism. From this perspective, I picked up not only "Labour" but also other texts by Zola, such as "The Masterpiece". On the other hand, I also explored whether similar problems could be found not only in Zola but also in other artists and writers such as the Neo-Impressionists.

研究分野：フランス文学

キーワード：文学と都市計画 文学と都市 フランス第三共和政 エミール・ゾラ トニー・ガルニエ

## 1. 研究開始当初の背景

現代社会の喫緊の問題として、「都市」の問題がある。私たちは、1950年には世界総人口の30%に過ぎなかった都市部人口は2050年までには70%に到達するという試算（国際連合による「世界都市人口予測2018年」）が存在する世界に生きている。このように世界に目を向けずとも、21世紀の日本も復興と開発によって大きく様変わりしようとしている。その一方で、近代文学において「都市」はひとつの大きな問題系をなしてきた。とりわけ、19世紀の市民社会の到来とともに爆発的に発展する小説の特権的な舞台は産業革命以降出現する近代都市にほかならない。なかでもフランス文学研究においては、第二帝政期に進められたオスマンによる首都改造を文学がどのように捉えたのかをめぐって豊かな成果が存在することは周知のとおりである。

その一方で、続く第三共和政期において都市と文学というテーマにはたして何が起こったのか？ 実際、オスマンのパリ改造という巨大なプロジェクトの後の緩やかな余波の時代がこの時代を覆っているようにみえる。だが第三共和政は、世紀を跨いだ1920年代になるとル・コルビュジエに代表されるモダニズムの建築と都市計画が世界を席卷する時代でもある。これを起点に第三共和政期を振り返ると、都市を合理的にマネジメントする科学の必要性が求められ、やがて都市計画が科学として成立していく時代だという視座が浮かび上がる。言うまでもなく都市計画は、たとえ一見目につきにくいとしても、21世紀の現代においても都市の変容を導く実行的な知として存在している。これが実際に模索されて誕生することになるのが、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのヨーロッパにほかならない。

だが都市をテーマに掲げるフランス文学研究において、都市計画の発展や知見を積極的に導入したものは決して多くはない。そこで本研究では、19世紀後半と20世紀前半をまたいで都市計画が成立していく第三共和政を時代的な枠組みとし、かねてより文学研究において大きな位置を占めてきた「都市」という問題圏において「都市計画」という観点を前景化させることを目指すものである。

## 2. 研究の目的

文学と都市という問題系は、都市という私たちの多くにとっての生存環境を検討する際の様々な手がかりを提供してきたという伝統がある。むろん本研究もこのような伝統に立脚するものである。その上で本研究はフランス第三共和政期を舞台に、黎明期の都市計画と同時代の文学との交点を探り、そこから文学作品——とりわけゾラの小説作品の読解を試みることを目指す。なぜならこのような問題設定においてゾラはある特異な事例を成しているからだ。晩年のゾラの諸作は「ルーゴン・マッカール叢書」に比して顧みられることが少ないが、そのなかにユートピア小説である『労働』（1901）がある。第二帝政期のパリを描いてきたゾラがこのようなテキストを残していること自体、文学と都市計画というテーマ設定においては極めて重要なことであるのはいうまでもない。だがそれにもまして、この作品は文学テキストとして特異な受容の対象になっていることを無視することはできない。実際、近代都市計画の嚆矢とされるトニー・ガルニエの『工業都市』（1917出版）において、中心的な建造物の図版を見ると、そのポルティコ上

部の壁面にゾラの『労働』の一節が刻み込まれているのである。これはガルニエが「工業都市」のマスタープランを構想するにあたってゾラの影響を何らかのかたちで被ったことを象徴するものにほかならないだろう。

本研究ではこのようなゾラとガルニエとのつながりを起点に、前述のとおり、主にゾラのテキストの読解を試みるものである。その一方で、むしろ文学と都市という問題はゾラとガルニエに限定されるわけではない。したがって、主にゾラを取り上げるが、その延長で他の文学者や芸術家と都市あるいは都市計画との関連を浮かび上がらせることも研究の射程に含む。このようなかたちで都市計画が下支えする都市に文学がいかに応接し、あるときは呼応し、またあるときは対峙するその様態を明らかにすることを目指す。

### 3. 研究の方法

本研究において上記の目的に取り組むためには、文献調査と現地調査が不可欠であると判断した。まずゾラを中心とする文学テキストの読解を試みるため、文献調査を広範に行う。この文献調査は、ゾラ研究だけでなく同時代の文学作品とそれらの先行研究を含む。これと並行して、フランス第三共和政における都市計画の成立をたどり直す。実は都市計画が成立する過程を詳らかにする先行研究は必ずしも充実しているわけではないことが事前リサーチで判明しており、そのため都市計画史についても文献調査を進める必要があった。またこれらの文献調査の具体的な進め方として、フランスの国立図書館等で網羅的な資料収集を行う必要があると判断した。その一方で、ゾラのテキストに関わる都市での現地調査を行うことで、テキストの読解を補足する。対象となる都市として、例えばサンテティエヌが挙げられる（ガルニエの「工業都市」は架空の都市のプランであるが、サンテチェヌ近郊を想定していたと言われており、ゾラも『労働』の執筆準備のためにサンテチェヌを訪れている。なおサンテティエヌでは、Musée de la mine を訪問し、産業革命以降フランスで生産される石炭の半数が産出されていた当時の実際にふれることができた。またサンテティエヌ郊外に位置するフィルミニも訪問した。フィルミニには 20 世紀半ばにル・コルビュジエの都市計画プランを基にした労働者向けの居住地区であるのだが、ある意味サンテティエヌはフランス第三共和政期の都市計画の発展を凝縮した街であることを確認することができた）。

### 4. 研究成果

上記のとおり、本研究ではフランスでの文献調査と現地調査を中心に据えて進めることを当初予定していた。ところが新型コロナウイルス感染症の発生のためとりわけ海外での調査の実施が困難になり、当初の 3 カ年の計画を 5 カ年に延長することを余儀なくされた。その間フランスでの文献調査を毎年実施することができず、また現地調査についてもサンテティエヌを訪問するに留めざるをえず研究の停滞を余儀なくされた。しかしながら国内での文献収集・調査を進め、本研究課題に関わる 4 本の研究論文を発表した。「〈言葉の受肉〉としての引用——ゾラとトニー・ガルニエのユートピア」（篠田勝英ほか（編）『引用の文学史』水声社、2019）、「ゾラの『労働』における労働からの解放のユートピア」（『常盤台人間文化論叢』第 7 号、2021）、「エミール・ゾラの『制作』における労働と都市——新印象派の方へ——」（『常盤台人間文化論叢』第 8 号、2022）、「ランボーによる「都市の設計」——散

文詩「都市」からル・コルビュジエへ」(『常盤台人間文化論叢』第9号、2023.この論考は本研究を引き継いでフランス第三共和政の後半を対象とする研究課題「都市計画の時代としてのフランス第三共和政とその文学：ル・コルビュジエと作家たち」と本研究を接続する役割を担っている)。

特筆すべき点として、文学研究からトニー・ガルニエとゾラとの関係を問い直した点をまずは挙げておきたい。実はトニー・ガルニエとゾラの関係についてはガルニエ研究において間歇的に言及されてきたが、ゾラ研究においてはほとんど見過ごされてきた。これに対して本研究では、『労働』をめぐる二人の影響関係の整理を踏まえテキストの読解を試みた。ここでは都市計画の問題をユートピア論と関連付けながら読解の軸に据えた。その一方で、ゾラの美術との関わりについて思いがけない研究のパースペクティブを発見することもできた。ゾラと美術との関わりについては、ゾラ自身がセザンヌと幼馴染であり、当初は批判に晒された印象派の画家たちを擁護する論陣を張ったことから、印象主義がもちだされることが通例だが、本研究では印象派の画壇を背景とする『制作』について、都市というテーマで検討を加えることで、ゾラとは伝記上の接触は見出すことのできない新印象派の画家との同時代性という視座を新たに得ることができた。これは今後の研究の糸口の一つとして立ち返りたい問題である。

なお最終年度には、ゾラの専門家で晩年のゾラの作品の研究もある御茶ノ水女子大学の田中琢三准教授をゲストスピーカーとして招聘し、研究を総括する研究会を開催した。その際にも、第三共和政期のフランス文学・芸術を都市計画という観点から再検討することの有効性について活発な議論をかわすことができ、本研究の問題意識を共有することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 彦江 智弘	4. 巻 9
2. 論文標題 ランボーによる「都市の設計」 散文詩「都市」からル・コルビュジエへ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 常盤台人間文化論叢	6. 最初と最後の頁 33～52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18880/00015180	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 彦江 智弘	4. 巻 8
2. 論文標題 <研究論文>エミール・ゾラの『制作』における労働と都市 新印象派の方へ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 常盤台人間文化論叢	6. 最初と最後の頁 31～47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18880/00014432	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 彦江智弘	4. 巻 7
2. 論文標題 ゾラの『労働』における労働からの解放のユートピア	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 常盤台人間文化論叢	6. 最初と最後の頁 111-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18880/00013697	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計3件

1. 著者名 横浜国立大学都市科学部	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 1052
3. 書名 都市科学事典	

1. 著者名 吉原直樹、樽沼範久、都市空間研究会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 176
3. 書名 都市は揺れている	

1. 著者名 篠田勝英、海老根龍介、辻川慶子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 384
3. 書名 引用の文学史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------